
THE SON
FERDINANDO FREGA

息子

THE FAMILY · 13

三つの言葉で事足りた父 — そして葬儀から何年もたったある朝、息子は自分の口から同じ落ち着きが出てくるのを聞いた。

Gillettenarrativeは、あなたを歓迎する。あなたはまだ、自分がどれほど幸運かを知らない — これから何かを受け取ろうとしているのに、その見返りに何かを求めた者は誰もいない。あなたはいま、私の世界に足を踏み入れている。刃に触れられるほど近くまで。だが、私は刃を売らない。それは私の母だけのものだ。これが終わるとき、あなたはもう同じではいられない。すでに次のひとつを探しているだろう。ひとまず、ここから始めてほしい。あなたのひとときを、ゆっくりと。

私は母から生まれた。息子として、母に似る可能性を多分に抱えている。少なくとも医学の文献はそう示唆しているし、今回ばかりは異を唱える理由が見当たらない。

だが、身体の特徴を超えたところに、別の何かがある。あとになってやってくる何か。それは年月を経て、残された痕跡のなかに、他人がそうだと言い張る姿ではなく、私たちの本当の姿のなかに現れる。

アイデンティティはXファクターから始まるのかもしれないが、遺伝がどこで終わり、人間らしさがどこで始まるのか、本当のところは誰にもわからない。DNAは身体を説明する。人生はそれ以外を説明する。

知性は母親から来ると人は言う。そのとおりだ。だが性格は、公式によって受け継がれるものではない。それは身ぶり、習慣、選択、そして沈黙を通して現れる。倫理、気質、スタイル、存在感。ひとりの人間の、目に見えない建築。

そして遅かれ早かれ、誰かがこう言う。「父親にそっくりだ」と。誰の目にも見える。だが、わかっている者はごくわずかだ。

完全に父親そのものである息子はいない。完全に母親そのものである娘もいない。私たちはみな、驚きが尽きることのない、もっと大きなゲームの一部なのだ。それでも私の場合、最終的な答えは単純に思えた。すべては父から来ていた。

あの洒落た男は、決して声を荒らげなかった。話すと、ほとんど歌のように聞こえた。イタリア語とフランス語とスペイン語が奇妙に混じりあい、ほんの一握りの言葉しか運ばない話し方。三つの言葉で足りることも多かった。「ここにいる」

何年ものあいだ、私たちはその言葉を当たり前だと思っていた。やがてある日、不可能なことがやってきた。そして不可能なことを前にして、彼は微笑み、こう言った。「払うのは1ドルだけだ」

その瞬間、私たちは彼が本当は何者なのかを理解した。彼は私の父だった。

だが、それは本当の啓示ではなかった。本当の啓示は何年もあとにやってきた。ある朝、困難な状況に同じ落ち着きで応じている自分の声を聞いたのだ。話す前の同じ沈黙。決める前の同じ微笑み。そして一瞬、父が部屋に入ってきたかのように感じた。それから気づいた。父は入ってきたのではなかった。一度も出ていってはいなかったのだ。

何が残ったのか？　見慣れた顔。違う響きをもつ声。時を越えてなお響きつづける人柄。なぜなら、どんな音楽でも、いちばん大切なのは声ではないからだ。大切なのは音だ。生き残る音。魂を運ぶ音。

そして、それが最後の驚きだった。私は記憶のなかに父を探して人生を過ごしてきた。その果てに知ったのは、父がずっと私の選択のなかに生きていたということだった。

彼はただ、私の父だった。そしてどういうわけか、今もそうなのだ。

フェルディナンド・フレーガ
Gillette Man ⚔️